



観る 知る 学ぶ
八女は
楽しい



華やかに舞い踊る「からくり人形」の世界

八女福島の燈籠人形

華やかに舞い踊る「からくり人形」の世界へ

～八女福島の燈籠人形～

八女提灯で明るく照らされた舞台。三味線やお囃子の音に合わせて美しい着物姿の人形が熱狂的な観客の拍手喝采に迎えられて登場し、華やかに舞い踊る…。毎年秋に八女の福島八幡宮の境内で上演されている八女福島の燈籠人形は、江戸時代から続く不思議な「からくり」の世界。約270年もの時を超え、賑やかな祭りの夜を彩ってきた燈籠人形には、八女の人々の心を動かす情熱が今でも生きている。

【公演日】 「秋分の日」頃3日間

【会場】 福島八幡宮
(八女市本町105-1)



【沿革】

福島八幡宮の放生会に、人形の燈籠を奉納したのが「燈籠人形」の始まり。

明和9年(1772)には、浄瑠璃作者福松藤助(元福島組大庄屋松延甚左衛門)が大坂より帰郷。人形を動かす工夫や当番町制の上演に力を貸して以後、動く人形が登場した。それが、主役となり現在の「からくり人形」の基礎ができる。

弘化2年(1845)に久留米藩の大検令(節約規制)により上演が禁止されていたが、明治4年(1871)燈籠人形の奉納が復活する。以後、第二次世界大戦による燈籠人形奉納の中止期間を経て、昭和52年(1977)には「八女福島の燈籠人形」として国の重要無形民俗文化財に指定される。



【演目】

- はるげしきちくしかたなしまもうで
・春景色筑紫濁名島詣
- たまものまえ
・玉藻之前
- よしのやまきつねただのぶはつねのつづみ
・吉野山狐忠信初首之鼓
- さつまはやとくにわかまるいつくしまじんしゃもうで
・薩摩隼人国若丸殿島神社詣

以上、4つの芸題を、保存会で毎年順番に上演している。

※8、9ページにそれぞれのあらすじを掲載。

【燈籠人形の舞台】

八女福島の燈籠人形の舞台は、二階建て三層に及ぶ屋台。建物全体は金箔、銀箔や漆塗りで出来ており、これは福島仏壇を造る技法の基になったと思われる。優雅さ精巧さは文楽の人形浄瑠璃に匹敵するといわれている。

八女福島の燈籠人形の歴史

【江戸時代】

慶長6年(1601)

田中吉政、柳川に本城を築き、三男康政に三万石を与えて福島城を大修復。
城下町の形態ができる(現 福島八幡宮氏子町内)

元和6年(1620)

福島城廃城になる。有馬豊氏が久留米城主(二十一万石)となり、
矢部川以北は久留米藩となる。

寛文元年(1661)

旧福島城下町民の氏神として、現在の場所に八幡宮を勧請。

延享元年(1744)

人形の燈籠を放生会に奉納
するようになる。

宝暦10年(1760)

福島八幡宮開元百年紀
に千燈籠を寄進。

明和9年(1772)

元福島組大庄屋松延甚左衛門、大坂から帰郷し、
からくりの技術を伝える。「(からくり人形)の基礎
ができる)当番町制による上演様式の確立。

安永8年(1779)

久留米城下櫛原町五穀神社内、天満宮勧請遷座祭
にて出張興行。全ての見物客から見料五文徴収。



大庄屋 松延甚左衛門が伝えたもの

弱冠21才で大庄屋を相続した青年・松延甚左衛門種茂は、幼年期に俳人若林宗元に俳諧の手ほどきを受け、既に14才の時に「霞(あられ)かとり取れば手に咲く蕾(つぼみ)かな」という句を作っていた。しかし翌年、飢饉と重税にあえぐ農民達による宝暦一揆が起こり、彼は自分の役職に深い疑問を持つようになる。25才の時、甚左衛門は官職を捨て大坂に出奔するという思い切った行動に出て、三年目の27才の時、福松藤助という筆名

で人形浄瑠璃作者としてデビュー。

それから39才になって福島に戻った藤助は、それまで動きのなかった燈籠人形を、動く「からくり人形」仕掛けに変えたと言われている。その後は俳諧の世界に身を投じ、俳人・橘雪庵貫廬(きつせつあんかんらん)として多くの俳句や物語を残した。貫廬のもたらした上方文化は、この地域の職人の才覚を刺激し、より高度な燈籠人形文化へと進化させたのだった。



弘化2年(1846)

久留米の儉約規制により奉納中止。
(大儉令)

天保15年(1844)

藩命に従わず、燈籠人形を奉納した記録。

【明治時代】

明治4年(1871)

燈籠人形復活。西矢原町より「七夕」奉納。

明治5年(1872)

坂東三津五郎一座の唄方・玉村孫一や笛太鼓名人・木村などが囃子方を指導啓蒙、上方風に変遷。

明治13年(1880)

学者・樋口平舎、「玉藻前」作詞。
吉池花鸚が燈籠人形の囃子長唄の台本作詞協力。

【昭和時代】

昭和18~21年(1943~6)

第二次世界大戦・戦時体制により奉納は中止。

昭和27年(1952)

福島燈籠人形、無形文化財として県の指定をうける。

昭和32年(1957)

福島燈籠人形保存会発足。

昭和52年(1977)

重要無形民俗文化財(第81号)として国が指定する。



昭和26年の公開屋台



昭和6年公開

(白黒写真は「八女福島の燈籠人形」八女市教育委員会発行より引用)

燈籠人形の舞台

燈籠人形の舞台は、高さ8m、幅14m、奥行6m余りの二階建、三層構造になっている。



三層は下から、下遣い場、横遣い場、囃子場になっている。この舞台は「屋台」と呼ばれ、組立て、解体が自由に行えるように、一本の釘・カスガイも使われていないのが特徴。屋台の組立ては、上演の一ヶ月前に一週間程度で行われる。建物全体は、金箔・銀箔・漆塗りで出来ており、福島仏壇を造る技法の基になっている。

見物席は、舞台正面の高台とその斜面で、旧福島城の石垣の跡がそのまま利用されている。

【千秋楽の舞台】

最終日の最終公演(千秋楽)のみ、通常は板や障子で遮られて見えない一層や二層の楽屋、三層が全て開け放たれて上演される。写真はの様子。

【背景】

物語が進むにつれ、舞台奥の背景が次々に変化する。専門職人によって色鮮やかに布に描かれた背景は、上演前には何枚も重ねて設置されており、進行に従って、一枚ずつ手前の布から下に落とされ、次の背景が現れる仕組み。



「玉藻之前」の背景



何枚も重ねて吊るされた背景を下から見上げる



普段の観客席。玉石が並ぶ斜面

【見物席】

屋台正面は、旧福島城第三郭の石垣の跡。その斜面を玉石でふき、野外観客席に仕立てた。高台は立見席になっており、上演時には、この高台と斜面が大勢の観客で埋まる。



観客に埋め尽くされる

【屋台と演題】

最盛期は十数台あったといわれる屋台も、現在は二台残すのみ。昭和39年(1964)以降「燈籠人形保存会」によって上演される演題(四つの演題を毎年順番に上演する。つまり、四年ごとに同じ演題が巡ってくる)に従い、使用する屋台が決まっている。

【三層】

舞台上部では、三味線、太鼓、鼓などが演奏され、地唄が唄われる(囃子方15~16人)。通常の上演では障子に遮られて見えないが、録音ではなく毎回生演奏が行われている。



【二層】

人形が動く舞台と、舞台左右の楽屋から成る。舞台奥側の人形は、左右の楽屋から操られて動くもので、それぞれ6人ずつ、計12人の遣い手(横遣い)がここで人形を操る。



【一層】

板で囲まれた屋台の基礎部分。ここには、舞台手前側の人形を、舞台床下から糸の操作で動かす遣い手(下遣い)6人がいる。



屋台の組立ては、一週間!!

8月下旬、福島八幡宮境内に公演一ヶ月前から屋台が組み立てられる。木材等の屋台の材料・大道具・人形等は、普段は境内奥にある蔵に保管されており、この時期に蔵の扉が開かれる。



①いつもの境内。全くの更地 ②組立て初日、クレーンを使って組み上げる ③三日後、ほぼ屋台の形になる ④公演当日の屋台

人形の上演

燈籠人形の上演は、人形を操る人形方や、唄や演奏を行う囃子方、演出の狂言方、衣裳方など総勢四十数名の協力で行われる。出演者は全て地元、福島八幡宮の氏子たちで、いつもは別の仕事や学校がある人たち(素人衆)だ。この時期、福島八幡宮に集い、燈籠人形の保存伝承を行ってきた。

人形を操る

舞台の人形には、動く人形(踊人形)と静止したままの人形(飾人形)がある。動く人形は、下遣いと横遣いの二種類があり、操り方が違う。

人形は、細木によって作られており、人形台に乗せられる。動く人形は、人形台に仕込まれた糸の操作で手や首が動く仕組みで、体の関節部分は鯨の髭をバネとして利用するなど、からくりの要素も取り入れられている。

よこづか 【横遣い】

舞台左右の楽屋から人形を操る。左手、右手、首、体などをそれぞれが担当し、左右の楽屋に6名ずつ、12名で人形を動かす。

舞台袖の見えない所から、長い棒を繰り出すと、人形台に取付けられた棒に触れ、それぞれに結びつけられた糸が屈伸して手や首が動く仕組み。

したづか 【下遣い】

舞台下で人形を操る。6人が、それぞれ手、首、体を担当するのは横遣いと同じ。人形の下から直接糸を屈伸させて、人形を動かす。人形の進行は、床に造られた溝を利用する。

【送り渡し】横遣い人形の見せ場の一つ。屋台の左側から進んできた人形が中央に来たところで受渡しが行われ、右側の楽屋にいる人(横遣い)によって操られる。この受け渡しの時に左右の呼吸が合わないと、人形は台車から落ちてしまう。「送り渡し」は難事中の難事、全国的にも珍しい妙技と言われる。

【素抜き】衣裳の早変わり。一本の三味線糸の操作で、人形は目にも止まらぬ早さで衣裳の早変わりを行う。実は、衣裳の縫い方に特殊な工夫がされている。

燈籠人形保存会

奉納がはじまった頃は福島町各町内当番で上演された出まわりのもの、現在は、毎年保存会で上演し続けている。

唄・囃子

上演は、太鼓の音で知らされ、上演中は三味線、鼓などの囃子に合わせて人形が動く。舞台の上の障子の陰で観客からは見えないが、上演時はいつも生演奏。録音ではない。

【囃子方】

舞台の上(三層)で、唄、三味線、太鼓、鼓などを担当する人たちは、「囃子方」と呼ばれる。総勢15~16人。

【衣裳方】

上演ごとに衣裳や顔などの早変わりが行われるため、公演の合間に人形の衣裳の状態を復元するなど、上演中の人形の衣裳まわりの世話をを行う。

【後見役】

舞台前面、左右に一人ずつ子どもたちが座る。市内の希望者が交代で務める。

【狂言方】

拍子木を方遣い、囃子と人形の呼吸を合わせる役割を担う。



各演目のあらすじ

【春景色筑紫瀉名島詣】

弁財天を厚く信仰する大名一行が従者を引きつれ、筑前・名島神社に詣でました。筑紫の瀉は、やわらかな春風が差し込み、帆をあげた小舟はのどかに行き交い、その帆影は春の波間に漂っています。筑紫の国は春たけなわです。門前の茶店で盃を傾けていた大名一行は、春の情景に酔いしれ思わず盃が進み、いつのまにかまどろむのでした…。(夢の中…)

衣をまとった舞姫姿の弁財天が側近である十五童子のひとり金財童子を連れだち現れます。愛宕の宮、筥崎八幡、あるいは千代松原…。最後に名島の社に舞い降りて周囲に桜吹雪が舞い散るなか、弁財天と金財童子は、心ゆくまで社前で舞い遊びました。



【玉藻之前】

平安時代の後期・鳥羽上皇に仕える玉藻之前という大変な美貌の持ち主で才媛がいました。院の寵愛を一身に受けていましたが、実は尾が九つあったという白面金毛九尾の狐の化身でした。あるとき、清涼殿において催された管弦楽の折、不思議な出来事が起こりました。そこで陰陽博士安倍泰成にその正体を見やぶられ、はるか遠く下野国那須野の原に逃げ去りましたが追討の三浦上総介に討ちとられました。

しかし狐の怨霊は殺生石となって近くを通る人畜に危害を加えるようになりました。その後、百年ほど経た後深草の治世、高德の僧・玄翁和尚がみ仏の力をかりて杖で殺生石を三度たたくとさしもの悪鬼も昇天成仏しました。



【吉野山狐忠信初音之鼓】

壇の浦の戦いで平家滅亡の功をたてた源九郎半官義経は、朝廷から兄・頼朝を追討せよとの命を受け、「初音の鼓」を賜ります。義経はこの鼓は一生打つまいと決心しますが、疑り深い頼朝は義経追討の兵を差し向け、義経は追われて大和国吉野に身を隠します。

ほどなく義経を慕う静御前が従者の佐藤忠信に守られ吉野まで会いに行きます。ところがそこにはもうひとりの忠信がいました。義経は本物の忠信を見分けるよう静御前に命じます。静御前はこの鼓を打ちますが、親狐の皮で張られた鼓を慕う子狐が、実は忠信に化けて自分を守っていたことを知ります。その孝心に打たれ、義経は源九郎の名を添えて狐忠信に初音之鼓を与えます。



【薩摩隼人国若丸巖島神社詣】

江戸時代のはじめ、薩摩国大守の若君・国若丸が戦の勝利とお家の安全を祈願するため、家老の新納武蔵守を従え、安芸の宮島に鎮まる巖島神社に詣でました。主従二人がその情景にひたっていた時、海中から五色の水柱が立ちのぼり、現れたのは巖島の尊い神の御姿でした。驚き喜ぶ兩人をさらに祝福するかのように、雅楽の調べとともに麗しき弁財天も現れました。巖島の神は戦での勝利を、弁財天はお家の安泰を約束するかのようにともにご神霊を現したのです。巖島の神威に感謝した主従は喜び、感謝して薩摩への帰路につきました。

